

「淡路町保健福祉センターの色彩設計」

Color planning for the newly built "Awaji-cho Health & Welfare Center"



CD 研究所
第2 研究部
田辺千尋
Chihiro
Tanabe

SUMMARY

A coloring plan was developed for the newly built Awaji-cho Health and Welfare Center, a township at the northernmost tip of the island, Awaji-shima. For our inspiration, we based the plan on the town's fundamental directions for development, which was considered the harmony in a traditional Japanese landscape. We, working together with the architects, Showa Sekkei, Inc., wanted the center to be a place to which residents felt they could easily use, of which they could be both fond and proud. These requirements were incorporated as well into the coloring plan.

要 旨

淡路島の最北に位置する淡路町に新築される保健福祉センターの色彩計画を実施した。色彩計画にあたっては、淡路町が町づくりの基本的な方向性としている「和のイメージ」との調和に配慮した。

また、当センターの建築設計を実施した(株)昭和設計と共同し、町民が気軽に立ち寄ることのできる地域に開かれた施設として要求される、親しみや愛着、さらには町民の誇りとなるような施設を目指して色彩計画を行った。

1. はじめに

1960年代末に始まった町並み保存の運動は70年代に日本各地に広がり75年には文化財保護法改正とともに伝統的建造物群保存地区制度が生まれ、この制度にもとづく町並みの保存再生事業が実施されてきた。歴史的な町並みを保存活用すること、それによりその地域固有の文化を守り育てるという町づくりが行われている。

このような背景のもと、淡路島においても淡路県民局プロジェクトを立ち上げ『公園島淡路』と銘打って、淡路島の風土に学び資源を評価することにより、淡路の誇るべきものの再発見に努め、地域住民の参画と協働のもと積極的な施策展開を図っている。その一端として淡路町に新設される保険福祉センターの内外装について、地域の特徴を活かした施設となるよう様々な視点から検討を行い色彩デザインを行った。

2. 淡路町の概要調査

2.1 立地条件

淡路島の最北端である津名丘陵の一角に位置し、東側は大阪湾を挟んで神戸市に、北側は明石海峡を挟んで明石市にそれぞれ向かい合っている。平成10年に開通した明石海峡大橋により



淡路町保健福祉センター外観

本州と地続きになったことで、観光や産業などの面で様々な発展を続けている。淡路島の北の玄関口、さらには国際的観光リゾート地として注目されている。

2.2 歴史との関わり

淡路町では古くから伝わる神話や伝説を和歌に詠み、その地を巡りながら島の魅力に触れることのできる『淡路・和歌の路』の整備を平成10年より開始し「歩くことのできる、歩いて楽しい町づく

り」のための活動を行っている。この活動により町の歴史性や漁港ならではの景観を保存・維持している。

2.3 色彩への配慮

横断防止柵や電柱、照明柱などにダークブラウンを用いたり、歩道の舗装材の配色をブラウン系でまとめるなど、伝統的な配色を用いることで和のイメージを損なわず地域一帯のイメージアップにつながるよう配慮している。

3. 設計事務所によるコンセプト

本物件は保健・医療・福祉の施策実施のための中核的な役割を担う施設として計画された。対象者は子供から高齢者まで地域住民すべてであり、使用目的も健康診断などの医療関係だけでなく、スポーツジムでの健康促進や調理実習などでの交流など多岐に渡っている。そのため、有効かつ柔軟に活用できるものであることを前提としている。

さらに、過疎活性化のために地域住民の誰もが気軽に立ち寄ることのできる地域に開かれた施設となるよう、不特定多数の人々に違和感なく受け入れられるよう工夫されており、色彩デザインにおいても配慮を求められた。

また、住民により親しみを持ってもらえるよう地場の特産物である淡路瓦を要所に用い、地域に根ざした施設であることをアピールしている。

4. 色彩設計のポイント

建築物の色彩を考えるにあたっては、より最適な配色デザインとなるよう様々な視点から検討を行っていく必要がある。CD研究所では対象物件の周辺環境との調和（環境特性）、対象物件の見られ方や見られる頻度（視点場特性）、対象物件の地域の歴史や風土（地域特性）、対象物件の用途や規模（機能特性）、そしてその地域に課せられている景観条例などによる色彩規制などを重要な要素と考えている。

外装に関してはすべてに配慮が必要であるが、内装に関しては建物の用途に合わせて特に機能特性に配慮が必要である。以下に外装、内装それぞれのポイントを述べる。

4.1 外装

まず、周辺環境の調査を行い色彩および自然や交通などの環境特性を掴んだ。建物に関しては主に住宅の慣用色である低彩度のブラウンや明るいベージュが多く、淡路瓦との相性も良い。

また、海となだらかな山並みに挟まれた開放的な立地で、県道にも面しているため、住民の他、車や通行人、フェリーの乗船客や堤防の釣り客など近景・遠景を問わず見られる頻度はかなり高い。そのため、個性的で奇抜な外装デザインではなく、親しみやすく上品なイメージが要求される。

そこで、漆喰調の白壁をメインに、木目板や蔵窓、さらに淡路瓦を要所に用いて淡路町の目指す和のイメージを表現した。また、サークルベンチやシンボルツリーなどを配し、住民や来訪者に憩いの場を提供した。

その地に古くから伝わる素材を用いることで、新しい施設でありながら地域固有の文化の感じられる施設となるよう配慮した。また、外装のイメージを内装にも展開し活かすことで、施設としての統一感が図られ、設計コンセプトにより説得力が増すと考えた。

4.2 内装

一般に階数が多く、各階に同様の機能が重なる場合には各階ごとにテーマカラーを設定し判りやすくすることが効果的でありデザイン性にも優れているが、本物件は地上3階建ての小規模施設であり各階に異なる機能が含まれることから、それぞれの用途や機能性を配慮した配色デザインとした。さらに、高齢者の視認性の低下や地域の人々の交流などを意識し、そこに外装同様淡路町を目指す和のイメージを加味した内装空間を検討した。

通常の医療施設とは異なり、利用者・年代・機能・用途が多岐に渡っている。そのすべての利用者に快適な内装空間を提供することが求められる。内装は色彩だけではなく、その空間を構成するすべての素材や形状・デザインを含めて考えられることが重要であり、それにより人々に親しまれ愛され続ける施設を作り出すことができる。以下にそのポイントを述べる。

(1) 色彩の心理効果

色彩が人の心理面に与えるイメージや効果を活用することで、それぞれの機能に最適な内装空間を作り出すことに配慮した。たとえば、緻密な作業を行う場には気持ちを冷静に保てる色彩を、人々の楽しい交流を促す場には暖かい色彩をというように、それぞれの機能を十分把握理解し、色彩の持つ力を最大限に利用して快適な内装空間を作り出すよう配慮した。

また、大きさから受ける威圧感を軽減させるなど、色彩には様々な効果が期待できる。

(2) ウェイファインディング

案内サインや各種表示は上品で洗練されたイメージばかりを追求するのではなく、視認性に十分配慮し目的地へのスムーズな導線を確認（ウェイファインディング手法）することで安全性が得られ、特にこれからの高齢化社会においては白内障などによる視覚の変化などにも配慮し対応することが重要なテーマとなっている。

サインは図と地の明度差に配慮し、判りやすさを第一に検討した。

(3) 素材選定

施設内の機能により選定する素材は大きく異なるが、選定した色彩を活かしつつ防汚、防滑、防臭、防災などメンテナンス性にも配慮した素材選びが大切である。

エントランスなど施設の顔として人目に触れる部分と、倉庫など隠れた部分での素材選定のバランスにも配慮した。

5. 内外装の色彩コンセプト

以上の点から、色彩設計の基本的なコンセプトを以下の通りとした。

- ①淡路町を目指す和のイメージとの整合性
- ②多くの人に違和感なく受け入れられる親しみのある配色（設計コンセプトとの整合性）

③それぞれの機能性を考慮した配色と素材によって、安心・健全な生活を感じさせるような内装空間

6. ゾーン別色彩コンセプト

基本コンセプトをもとに、各部屋を機能別に5つのゾーンに分類し、それぞれに相応しい色彩を検討した。施設全体の統一感を持たせるためにメインの壁や建具などは同じ色彩・素材で統一し、主に床面と椅子などの家具類にこの色彩を展開した。さらにより地域の特徴をアピールするために外装イメージを作り出している漆喰調の壁の白と淡路瓦のグレーのコントラストを内装にも生かした。白はオフホワイトを壁と天井に用いすっきりと清潔感を持たせ、グレーはサインおよびアクセントに用いた。(写真1)



写真1

塗装壁は異なる仕上げ方法により、目地を境いに表情に変化を持たせている。

淡路瓦の色に関しては、いぶし銀であり若干の光沢があるため、瓦そのものを入手し機械測色を行った。その結果マンセル値では明度5.22であったが、サインとして展開する場合、組み合わせる色とのコントラストを考慮し明度を3.5まで下げたグレーとして視認性に配慮した。

外装のイメージがそのまま内装に活かされることで、施設としての統一感が増し、より和のイメージが強調された。



写真2

また、廊下や手すり、ベンチ、腰壁など壁面の一部などには木質系素材を用いているため、白とグレーの配色の中に暖かみを与え、効果的な間接照明によりクールすぎない空間イメージになったと考えられる。(写真2)

ゾーン1：作業空間

診察室、検査室、健診室などの作業空間では正確さや緻密さなど精神面の落ち着きが要求されるため、清潔な印象を与え気持ちが落ち着くGY系の色彩をアクセントに配色した。(写真3)



写真3 作業空間

ゾーン2：移動空間

エントランスホール、エレベーター、階段などの移動空間は施設を利用するすべての人が使う空間であることを考慮し、親しみやすく上品な空間になるようナチュラルなイメージのYR～Y系の色彩をアクセントに配色した。(写真4)

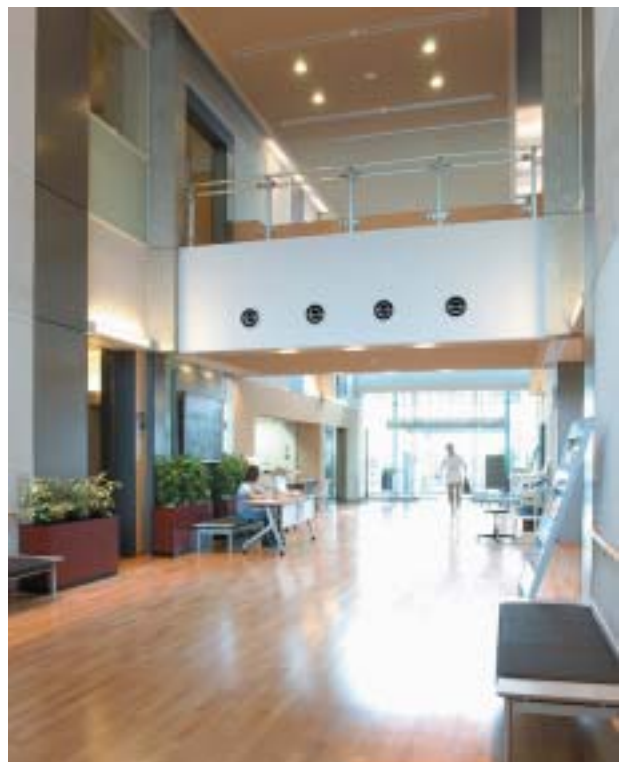


写真4 移動空間

ゾーン3：共有空間

休憩室、スタッフ控え室などの共有空間は、用途は様々であるが不特定多数の人が利用することを考慮し、多用に展開できるようにシンプルで親しみやすいY系の色彩をアクセントに配色した。

ゾーン4：生活交流空間

交流サロン、多目的ラウンジ、調理実習室などの生活交流空間は様々な人がふれあい交流を深める場であるため、暖かく優しいイメージの感じられる空間になるよう暖色系のR～YR系で明るい空間を演出した。(写真5)



写真5 生活交流空間

ゾーン：5管理空間

事務関係などの管理空間では効率良く事務ワークを進めるために、気持ちを鎮静化させる効果のあるB系の色彩をアクセントに配色した。(写真6)



写真6 管理空間

7. おわりに

各機能特性に配慮した色選定を行うことにより、快適な内外装デザインとなることを検討した。基本となる壁面や建具など比較的大きな面には同素材を用い、アクセントの展開の仕方も共通とすることで、施設全体の統一感を目指した。

また、淡路町の目指す和のイメージを表現するために外装にナブコホワイトを採用し、漆喰調の壁を表現した。それにより外看

板に用いた赤が引き立ち、より和のイメージを強調することで、淡路・和歌の路のルートに相応しい施設になったと考える。(写真7)



写真7 エントランスにある看板